

2023年10月8日 礼拝説教

旧約 出エジプト記 第33章18～23節

新約 マルコによる福音書 第8章31節～34節

「私の後ろに従いなさい」とイエスさまが言われたのは、福音宣教の旅をするイエス・キリストが最初に弟子たちに受難予告をしたその場面でした。イエスさまは、今ここで、初めてご自分のメシアとしての使命を、弟子たちにはっきりとお話になりました。ご自分が苦しみを受けて排斥され殺されるということ、そして復活するということ、それこそがご自分の使命なのだということを、弟子たちにここで初めてはっきりとお話しになりました。

しかし、弟子たちはこの時、イエスさまのこの言葉の意味を理解することは、全くできませんでした。イエスさまは、多くの病人を癒し、力強い教えを語る、力ある輝かしいお方でした。イエスさまが「静まれ」というと、荒れ狂う嵐はすぐに静まりました。イエスさまが「出ていけ」というと、悪霊は取りついた人から出て行きました。多くの人がイエスさまの教えを聞こうと集まって来て、イエスさまの力強い教えに喜んで耳を傾けました。イエスさまの癒しによって、足の萎えた人は立ち、耳の聞こえない人は聞こえ、目の見えない人は見えるようになりました。

それだからペトロは告白したのかもしれませんが。「あなたはメシアです」と。ペトロも、イエスさまがメシアであるという本当の意味を全く理解できていなかったのです。力強いイエスさまは、メシアなのだ。メシアなのだから、殺されるなんていうことがあるわけがない。ペトロは、イエスさまを脇へお連れして、いさめ始めました。「いさめる」「忠告する」とは「叱る」と同じです。ペトロがイエスさまを叱ったのです。イエスさまはこういう働きをしてくれるはずだと決めつけて、メシアはこうあるべきだと決めつけて、ペトロが上になり、イエスさまを下において叱ったのです。・・イエスさまの後ろに従ってきたつもりだったのに、いつの間にか前へ出て、ペトロはイエスさまに教えようとしていました。あなたはこういうお方のはずです。メシアはこうあるべきである。殺されるなどと言ってはなりません。・・・他人事ではありません。私たちも、私たちは十字架と復活の出来事を知っているはずなのに、神さまの前へ出て、神様に自分の確信を押しつけようとしていることがあります。神は愛である、正義である、秩序であるから、だから神はこうあるべきであります。教会はこうあるべきであります。神学校はこうあるべきであります。・・従っているつもりだったのに、いつの間にかイエスさまの前へ出て、イエスさまの上立って意見していることがあることがあります。

イエスさまはそのペトロを叱りました。「サタン、引き下がれ」。「サタン」、私たちは、イエスさまがここでペトロを「サタン」と呼ばれたことに衝撃を受けます。「サタンのような者」ではなく、「サタンよ、ペトロから出ていけ」でもなく、ペトロを「サタン」と呼んでいるのです。・・「サタン」という言葉は、辞書を引きますと、旧約聖書ではもともと「敵対する者」「妨げる者」という普通名詞で用いられている言葉です。注解書によりますと、マルコによる福音書では、「サタン」は、「神の御心を妨げる者」という意味で用いられているとありました。ペトロのここでの発言は、イエスさまを十字架から遠ざけようとする

行為です。十字架の出来事は、神さまの最大の愛の出来事ですから、それを邪魔する者は、神さまの御心に決定的に反した者、サタンそのものです。・・・でも、この「サタン」という言葉が、あまりに強烈なので、私たちはここで、突然断罪され切り捨てられるように受け取ってしまいます。

ペトロだって、悪気があったわけではありませんでした。ペトロなりに一生懸命だったのです。「あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」イエスさまはそう言われましたが、人間に神のことが全部わかるはずがありません。人間は、どんなに神様の御心通りにしようとしたって、人間たちのことを思って、人間世界の考えと感情を引きずってしか、何を言うことも、何をすることもできないのです。

たしかに、ペトロの理解は間違っていました。でも、ペトロは、イエスさまを救い主だと信じていたから、ああ言ってしまったのです。イエスさまがこの世の中を変えてくれるメシアだと思っていたから、そしてイエスさまが大好きだから、ああ言ったのです。それなのに「サタン」と・・・神さまの御心を理解することのできない私たちは、いつ神さまに「サタン」と言われるかわからない。そう思うと、神さまに何も言ってはいけないんだと、何を言うことも怖くなります。神様に捨てられないように、自分を捨てなければと自分を抑圧して、自分が何も考えないように、何も感じないように自分を強いるしかないかと思ってしまう。

しかし、イエスさまはここで、ペトロに「サタン」とだけ言って非難しているのではありません。「サタン」と呼びながら、同時に「引き下がれ」と言われているのです。「引き下がれ」は、直訳すると「私の後ろへ去れ」「私の後ろへ行け」です。イエスさまは、十字架の邪魔をしようとしたペトロに対して、「サタン」という激しい言葉でその間違いを指摘しながらも、同時に、「私の後ろへ行け」と言われているのです。「消え失せろ」ではなく、「引き下がれ」「私の後ろへ」です。

「私の後ろへ」・・・「私の後ろについてきなさい」それは、かつての召しの言葉、漁師だったペトロが初めてイエスさまに呼ばれた言葉でもありました。「私の後ろへ」・・・それは、間違っただけで前に出てしまった者を叱りつけ、後ろへと引き戻す指導の言葉でありながらも、それでもなお「後ろにいさせてくださる」、イエスさまの後ろと一緒に居させてくださるという言葉でもあるでしょう。何をしても、決して見捨てないでいてくださるイエス・キリストの姿がここに 있습니다。私たちは、失敗を恐れて縮こまらなくてよいのです。どんな間違いをしても、神さまは私たちを決して見捨てません。

私たちが持っている信仰理解も、間違っているかもしれません。神を賛美しているつもりの私の言葉も行動も、福音伝道の妨げになるかもしれません。でも、私の思いを、私の確信を、素直に神様に祈り求めてよい、と聖書は言います。間違ったら怒られるでしょう。しかし、イエス・キリストが、ペトロをサタンと叱りながらも見捨てなかったように、私たちをも決して見捨てません。何をしても、神様は、間違いは間違いだと教えてくださり、そして、「イエスさまの後ろ」へ行くようにと導いてくださいます。イエスさまの後ろが私たちの本来の居場所だからです。

今日の旧約聖書箇所、出エジプト記 33 章は、モーセが失意の中で主の栄光を見たいと願った場面でした。その時モーセは主の御顔を見せていただくことはできませんでしたが、「主の後ろを見た」と書かれています。神さまは後ろ姿を見せてくださるのです。

「イエスさまの後ろ」は、イエスさまの後ろ姿をずっと見続けていられる場所です。イ

イエスさまより前を歩こうとしてしまったら、イエスさまが見えませんから勝手な方向に行ってしまうかもしれません。勝手な方向へ迷い出て、イエスさまからはぐれてしまうかもしれません。でもイエスさまの後ろにくっついて歩いていれば、イエスさまを見続けていられる。イエスさまを見失って迷子になることはないのです。

主の後ろ姿を見続けていましょう。主の背中をいつも見ていられる、主の後ろにいきましょう。主の後ろ姿を見続けることは、それがそのまま、主に従い行くことにつながります。主なる神さまと同じ方向を向いて、主の後ろを従い行くのです。神さまの背中をいつも見ている者は、生きて働かされている神さまの進み行かれるのと同じ方向へ、神さまの後ろにくっついて、歩み続けるのです。主の後ろで、主の後ろ姿を見続けるとき、人は神に聞き従う者へと変えられるということなのだと思います。

さて、ペトロは今、ペトロは今、「サタン、引き下がれ、私の後ろへ」と叱られました。この時ペトロはきっと、「サタン」というお叱りの言葉にびっくりして立ちすくんでしまったに違いありません。ペトロは、後ろへ、一緒にいた弟子たちのもっと後ろへ、そして群衆たちに紛れてもっと後ろへと遠く下がりながら、不安になっていたことでしょう。イエスさまは、そのペトロを放っておきません。イエスさまは言いました。「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、私に従いなさい。」イエスさまは、弟子たちと、群衆たちと、そして今叱られてどうしていいか分からなくなっているペトロに対しても「私の後に従いたい者は、従いなさい。着いて来なさい」と呼びかけてくださったのです。ペトロは喜んで、イエスさまの後ろにくっついて、イエスさまと一緒に歩き出したことでしょう。

イエスさまに従うとは、イエスさまの後ろにいつもいること、イエスさまの後ろについて行くことです。イエスさまの後ろ姿を見続けて、主の栄光によって力と平安をいただきながら、イエスさまと同じ方向を向いて、一緒に歩ませていただくことです。ペトロはまた、イエスさまの後ろに従って歩み始めました。イエスさまの後ろにくっついて、イエスさまを見つめながら、日々何でもイエスさまに相談しながら、イエスさまから勇気も希望も知恵もすべてを与えていただきながら、歩みを続けたことでしょう。神さまは私たちにも、「後ろ」という素晴らしい居場所を与えて、一緒にいなさい、ついて来なさいと、招いて下さっています。「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」

「自分を捨てて、従う」とは、大切な自分よりもイエスさまをこそ見つめる、ということです。自分を握りしめるよりも、イエスさまを握りしめて、イエスさまの後ろについて行くことです。「自分を捨てて従う」とは、決して自分の素直な感情や沸き起こる考えを無理に捨てて、足を引きずりながらいやなことをすることではありません。「自分を捨てる」というと、私たちはどうしても、日本文化にある滅私奉公のニュアンスに惑わされてしまいがちですけれども、イエスさまは決して、自分の感情や考えを無理やり捨てて命令通りに動くロボットになれ、とはおっしゃっていません。

イエスさまに従うとは、いつもイエスさまの後ろにいて、イエスさまをどんな時も見上げつつ歩むことです。主に従うとは、主の後ろで、主の栄光を見せていただきつつ、主と同じ方向を向いて歩ませていただくことです。「自分を捨てて」と言われると、私たちはどうしても、自分の力で「自分を捨てなければ」と思ってしまいます。自分の力で自分を抑えつけなければと考えるしまう。でも、自分をどうにかしようと自分にばかり集中してし

まっでは、従うべきイエスさまを見失ってしまいます。大切なのは、自分よりもイエスさまの後ろ姿に集中することです。自分を見てうつむくよりも、他人と比較して横をきよろきよろ見て動揺するよりも、大切なのは、ただ主の後ろ姿を見上げ続けることです。主が私たちに示してくださっている主の恵みの後ろ姿から目を離さず、ひたすら主の後ろを見続け、主から離れないようにすること、それが、そのまま、主の後ろに従うこととなります。

ただ、それは、「自分の十字架を背負って」というのですから、ただ楽しいだけの簡単な道のりではないでしょう。十字架の道を歩まれるイエスさまについて行くのですから、険しい道です。自分自身の力ではとうてい無理だと思えません。この時、イエスさまに従ったペトロは、この後、イエスさまが十字架に付けられた時、イエスさまを知らないとして三度も言って逃げてしまいます。ペトロは、「自分を捨てる」のではなく、イエスさまを捨てたのでした。・・・しかし、そのペトロも、イエス・キリストの十字架の死と復活が実現した後には、復活のイエスさまの命に生かされて、復活のイエスさまの後にしっかりとついてもう二度と離れず、福音を宣べ伝える者となりました。イエスさまの後ろという、本来の居場所で、神さまの平安と力に満たされて歩んで言ったのでした。

私たちにもそれが可能です。今を生きる私たちにとって、主が見せてくださる後ろ姿とは、第一に、歴史の中に働かれた神さまの出来事のことでしょう。つまり、聖書に記された啓示です。主の後ろ姿を見るとは、「イエス・キリストが私たちの救いのために、十字架で死なれ、復活された」という聖書が啓示する事実から、決して目を離さないことです。私たちには、聖書が与えられています。そして、主日の礼拝が与えられています。聖書を通して、礼拝を通して主の後ろ姿を見る幸いが与えられているのです。聖書と礼拝が与えられていることに感謝します。私たちは、何よりもこの聖書を通して、この礼拝を通して、神さま御自身を見、神様の栄光が私たち働きかけてくださっている今をしっかりと受け取りたいと思います。

もちろんそれは簡単なことではないでしょうけれども、私たちを決して見捨てない神様が、私たちが、主の後ろという場所で、いつも喜びに満たされて、主に従っていけるようになるまで、恵みと憐れみを持って、導いてくださいます。私たちには、主の後ろという素晴らしい居場所が与えられているのです。そして、私たちがその「後ろ」という居場所から迷い出ようとするときには、その間違いを教えてください、またイエスさまの後ろへと引き戻して、本当にしっかりと自分の十字架を背負って主に従いゆく者へと導いてくださるのです。ですから、私たちはただ、その見捨てないイエス・キリストの神様の安心の中で、神様にすべての思いを打ち明けながら、どんな時もイエス・キリストをしっかりと見上げてついていきたいと思えます。